

2012年 和本で見る書物史

第10回 草紙から見た書物の大衆化

はしごち こうのすけ
橋口 侯之介

和本入門 pp66-88

浄瑠璃本屋が発展していく

江戸時代の草紙は、浄瑠璃を本にするところから始まった。初期の浄瑠璃はお伽草子などの中世の語り芸の系譜を引いた題材を、操り人形と三味線で演じた。その語りの部分を絵入りの本にしたのが江戸時代前半の浄瑠璃本である。正本ともいう。近松門左衛門などによる書き下ろしの作品が出てくる元禄以降と区別して「古浄瑠璃」という。

浄瑠璃本屋は始め京都にでき、やがて江戸にもあらわれる。小ぶりな中本サイズで、安めにつくられた。近松門左衛門が活躍した大坂では遅れて出現するが、その出版権を独占したので一時は大きな勢力を持った。

この本屋を別名・草紙屋ともいい、やがて浄瑠璃以外の大衆本の世界を築き上げていく。

江戸の地本問屋

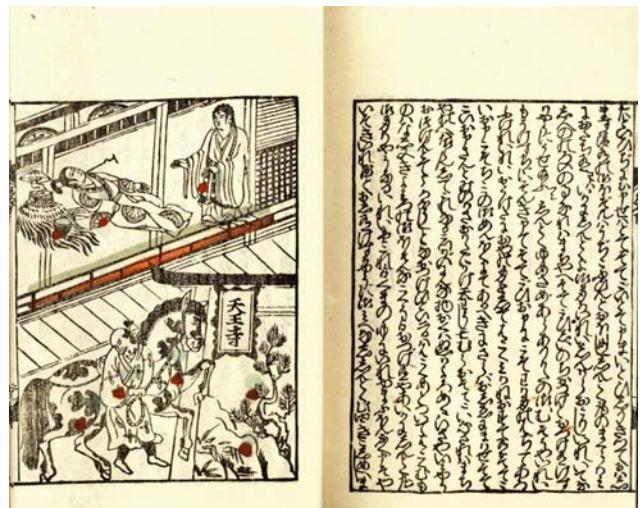
江戸でも早くから浄瑠璃本屋が活動していたが、物之本屋（書物屋）が十分に育たなかつたこともあって、まだインフラが不足していた。ようやく京都で始まつた草紙の出版を鱗形屋（うろこがたや）という店が発展させた。はじめ子どものお年玉用に縁起の良い赤い表紙にしたお伽ばなしの本を出した。これを赤本という。

18世紀中頃（延享頃）には古浄瑠璃のように表紙を黒にして（安く作れるから）、もう少し高年齢向けに中世の語り物を題材にした本（黒本）も出した。少しづつ発展し、1770年代の安永期には、表紙を安い草木染めにした青本が出てくる。新品のときはもう少し緑色（=青）をしていたが、時がたつと黄色になってしまう。

安永4年恋川春町が書いた『金々先生栄花夢』で文学的には軽妙洒脱な大人向けの現代小説となったことを転機として、それ以降を黄表紙と呼ぶ。

表紙の色が変わっても共通しているのは、1冊が5丁建て（現在の10頁）で、赤本・黒本は1冊だが、青本以降おおむね2巻か3巻構成である。江戸時代の中期（おおむね18世紀）では、関東の地で生産する紙はまだ少なく高価だったため、漉き返しのリサイクルの紙を用いた。

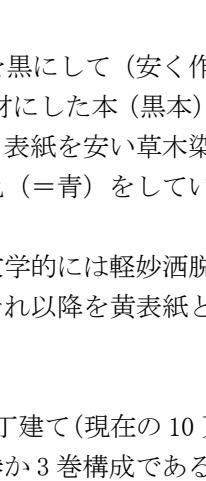
江戸では廃棄される紙（故紙という）を回収する仕組みが整つていて、立て場



古浄瑠璃本。複製の『せつきやうしんとく丸』

黄表紙『忠臣房受帖』(ちゅうしんぼううけい)

漉き返しの『里家夜位太平榮』(さとがよいおおひらのさかえから)



に集まった後、浅草付近で煮直して再び紙にした。漂白が不十分なので灰色をしていた。塵紙ともいう。値段は安く、1冊あたり6文から8文で、安い食べ物の代名詞だった屋台のかけそば（二八そば）16文より安かった。草紙屋は極力経費を切り詰めていた。いずれも絵を中心に、筋書きと登場人物のせりふを入れた今日のコミックと同じである。絵草紙ともいい、絵巻物以来の歴史がある。これが現代のコミック隆盛と深く関係している。くずし字の変体仮名書きだが、寺子屋のおかげで当時の子どもから大人まで楽しんだ。

このような大衆小説を出したのは、物之本を出す書物屋でなく、江戸では地本問屋といった。

19世紀の文政年間に入ると、しだいに話がこみいって来て、3冊（15丁）では足りなくなり、長編ものが出てくる。表紙を多色刷りにして本文を長くした形態を「合巻」と呼ぶ。中には100冊を超えるものまで出てくる。これが明治の初めまで続く。代表作は柳亭種彦作の『修紫田舎源氏』だが、38

編まで出たところで天保の改革で摘発されて発禁となった。この頃になると淨瑠璃より歌舞伎に人気が出たので、ほとんどの作品は歌舞伎とコラボレーションした。



本のサイズでジャンルが分かれる

書誌学ではこれを書型といふ。今日でも学術専門書はA5判（菊判）、文芸や実用書はB6判や四六判、さらに手軽な文庫判というように、大きさが本のジャンルを象徴するのと同じで、江戸時代の本も書型から本の種類をおしそかくことができる。

和本の料紙には美濃判と半紙判の2系列があった。

大本 これは美濃判紙用いたもので現在のB5判に匹敵する。縦27センチ。物之本は圧倒的にこの判である。

中本 大本の半分の大きさ。草双紙のほとんどはこの大きさで、現代のB6判の世界と大きさも共通する。

特小本 この中本をさらに半分にした大きさ。着物の袖に入れて持ち歩けるという意味の袖珍本ともいう。

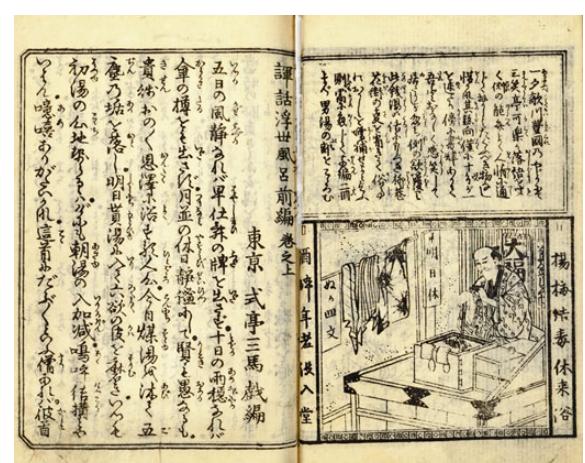
半紙本 縦が22から23センチ程度。現代のA5判が近い。物之本でも通俗的なもの、あるいは絵本や俳諧など。

小本 半紙本半分のサイズ。現代の文庫本とほぼ同じである。大衆本に多い。

幅の広い江戸文学

草双紙より文章を増やして読ませる文芸物もたくさん出了。十返舎一九の『道中膝栗毛』や式亭三馬の『浮世風呂』などで知られる滑稽本、為永春水の『春色梅児晉美』を代表とする悲恋物の人情本などがそれである。

さらに地本屋たちの草双紙の成功に、書物屋たちも競うように大衆向け市場に向けて本を売り出した。この文章主体の娯楽読み物を読本といい、歴史物や中国の小説などから題材をとり、当時は「奇談」と呼んでいた分野である。はじめ大坂の本屋が出しており、上田秋成の『雨月物語』などがあった。やがて山東京伝と曲亭馬琴といった実力派の作者が登場すると、その中心は江戸に移った。



客の家にあがりこんで話しかける貸本屋。後ろから別の貸本屋があがってきた



曲亭馬琴の書いた『南総里見八犬伝』などは相當に人気があった。よく売れたので次から次へ続きがでて、ついに全九輯百六冊となる大長編になった。発行されるたびに人気が高まっていたので、第九輯目の発売日には、買い求めに来る客が店先に詰め掛けてきたので、まるで火事場のような騒ぎだったと作者自身が手紙に書いている。発行部数も1万部を超えるようになった。

上記の人情本・滑稽本・読本はいずれも貸本で読まれることが多かった。

貸本の盛んな貸本屋

黄表紙は1冊安く気軽に買えたが、合巻の時代になると価格が上がってしまった。そのために貸本屋が活躍した。文化5年(1808)の「町々貸本屋世話役名前」という史料がある、そこに江戸市中には656軒の貸本屋があったことを示している。貸本屋は店舗で営業するのではなく大きな風呂敷包みを背負って家々を回った(行商という)。一人で170~180人くらいのお得意様を持っていたという。これを650倍すると江戸だけで10万人以上の読書人口を持っていたことになる。

貸本の値段は新本価格の6分の1から10分の1なので、同じ本を10人以上が見て初めて利益ができる。むしろ20人以上が見たのではないか。1万部出た『南総里見八犬伝』などは今なら20万部以上のベストセラーである。

往来物

地本問屋が出した本は小説などの文芸ものだけではない。その種類は、今日の書店の棚を見るのとそう変わらないほど幅が広く充実していた。実用書のコーナーでは日常生活の便利な知識である

「重宝記」^{ちゆうほうき}が幾種類も並び、金魚や虫の飼い方、庭の花や樹木の育て方、^{サブリメント}薬の解説本や健康法、子どもたちの遊びの本、ゲーム本、マナ一本、女性向けの各種の婚活本、化粧の本、着物の柄や服地に関する本、宴会のかくし芸の指南書などなど枚挙にいとまなかった。この広大な様子を知っておく必要がある。



典型的な往来物『江戸往来』の続編。内容は江戸の地理や歴史の知識。御家流(おいえりゅう)という江戸時代独特のくずし字で学んだ。本の上部は付録。ここで本屋は競争をした。

その代表が全国にあった寺子屋(手習いの師匠)向けの教科書である。はじめ教材として過去の有名な往復書簡集を手本として文字や手紙文の書き方を教えたので「往来物」と呼ばれた。

やがて数学の本、商人向けの実用教育などさまざまな種類が出され、地本問屋と書物屋が入り乱れて参入していった。

※草紙は冊子からきた。草子、冊子、双紙、草紙どれを書いても「さうし」で意味は同じ。

※中国では小説は文字通り「小さな説」のことで、「伝奇」という分類とされて「まま子扱い」だったこともあって、あまり盛んではなかった。